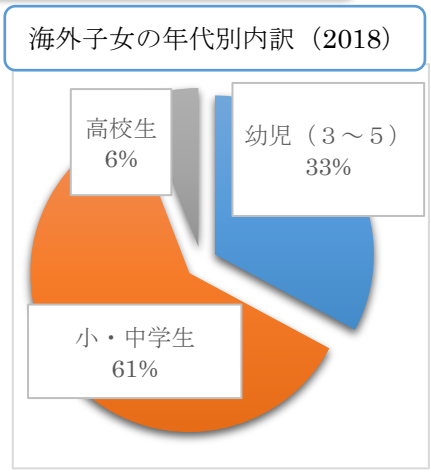
ニューヨーク補習授業校だより

絆・きずな

夢のふくらむ学校

令和元（2019）年
１１月３０日発行
第２９号
文責（校長）片山　隆

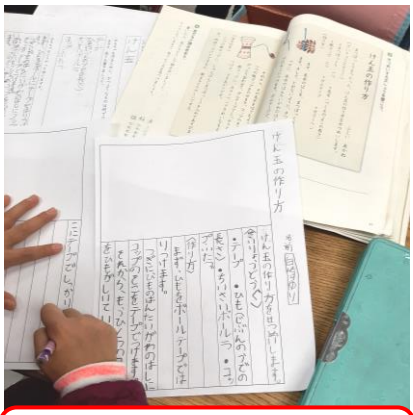
バイリンガルに育てるための母語の大切さ



今年も、次年度の入園入学受付が始まろうとしています。先月の学校説明会には、１３０名余りの保護者の方が参加され、補習校についての全般的な説明を行いました。多くのご入園ご入学を期待するところです。

日本を離れ海外で生活する幼児から高校生までの数は、約１３．７万人と言われています（2018 年度）。その内訳は右のグラフのとおり、幼児（３～５歳）４．５万人（３３％）、小中学生８．４万人（６１％）、高校生は０．８万人（６％）となっています。

これは前年比約１．１％の増加ですが、その中身は（公財）海外子女教育財団によると、駐在員の若年化傾向による帯同子弟の低学齢化の傾向が見られるそうです。幼児期から、日本を離れて外国語の環境に育つ場合、母語の存在がたいへんに重要になってきます。バイリンガルを目指して海外での子育てを始めても、母語はもちろん、第二言語も中途半端なまま帰国してしまっては、何のために外国で生活してきたのか分からないことになってしまいます。トロント大学名誉教授でトロント補習授業校高等部校長の中島和子先生の研究によると、「接触が少ない母語を確立して高度な第二言語を習得することは非常に困難であり、親や学校教育機関が子どもの言語教育に意図的に介入して初めて可能になる。」ということです。



読み手を意識した説明文を、順序立てて書きます。（初等部２年国語）

中島先生の教え子で、現在上智大学外国語学部で教鞭を執るある女性も、このように経験を語っています。「１歳で親について日本を離れ、１５年間を海外で育った私が日本の大学でも通用する読み書きもできるバイリンガル・バイリテラルになれたかというと、それは日本語に重点を置いた（生活をしていた）からだ。（略）母親は、日本語をおろそかにして両言語とも中途半端になるのを恐れていたそうである。（略）幼少期に特に心掛けたのは読書である。幼いころは母が読み聞かせをしてくれ、長じて日本から本やビデオを送ってもらい、補習校の図書館でもたくさん本を借りて読んだ。さらに、”家の中の会話は日本語のみ”を徹底していた。日本語の教科学習もバランスの取れたバイリンガルに育った要因である。現地校の勉強と平行して、国語・算数数学・理科・社会などの勉強を高校まで続けた。国語以外の教科を勉強することで学年相当の漢字や語彙力をはじめ、より高度な日本語を習得できたと思う。通常家で使う日本語とは違う幅広い語彙が身についた。（略）家庭で日本語を使用するだけでは、自分が習得したいレベルの日本語を維持できないと感じて、日本の学校の教科学習に励んだ。」

上の写真は、初等部２年生の国語の授業で、自分の考えたおもちゃを友達に説明する文章を書く授業の一コマです。「はじめ、中、終わり」を意識して、何を使って、どのように作り、どのように遊ぶかを説明することになるのですが、自分の理解を文章にまとめる作業は、初等部２年生にとって適度な負荷を与え、書く力・考える力を養うのにふさわしい題材です。補習校では、初等部から書く力の育成に取り組んでいます。

受付及びスクリーニング日程

W校 12/7・12/14	9:30 ～ 10:30	幼児部新年中
	11:00 ～ 12:00	幼児部新年長
	13:30 ～ 14:30	初等部新１年
LI校 1/4・1/11	10:10 ～ 10:55	幼児部新年長
	11:25 ～ 12:10	初等部新１年
	13:15 ～ 14:00	幼児部新年中

～～今後の日程～～ 令和2年度入園入学受付について

次年度の入園入学受付に向けて調査書をお送りいただいたご家庭には、今後、左記の日程に基づき順次スクリーニングの予定日時がメールで送られますので、ご確認をお願いいたします。

なお、お知り合いの方、お近くの方で補習校に興味がおありの方をご存じでしたら、是非補習校事務所までご連絡いただくようお伝えください。